



TITLE:

吐蕃佛教の史料について

AUTHOR(S):

佐藤, 長

CITATION:

佐藤, 長. 吐蕃佛教の史料について. 東洋史研究 1955, 13(5): 395-418

ISSUE DATE:

1955-01-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/139018>

RIGHT:

吐蕃佛教の史料について

佐藤 長

一

チベットに佛教の基礎が確立されたのは所謂吐蕃の時代であつて、その意味からして文化史上からも佛教史上からも吐蕃の佛教は考察の對象とすることができる。しかし、從來その史料は必ずしも期待し得るような條件のものとは存在しなかった。一般にチョーム Alexander Csoma de Kőrös 以來吐蕃佛教史を扱う場合、その材料としたものはチベット傳來の佛教史 *chos hbyun* の類で、ロックヒル W. W. Rockhill などに至つてはじめてそれを中國史料と對照して少々客觀的な吐蕃佛教史が構成されたのである。²⁾ バッシュェル S. W. Bushell が舊唐書吐蕃傳の翻譯を發表してから、³⁾ この中國史料を利用する方法は擴まり日本でも從來この方法に従つて吐蕃佛教史を考へてきた。しかしそのチベット、中國の史料の間には不一致な點が少から

ずあり、解決できない問題が多く後に殘された。

その問題というのは先ず第一に王名、年代の不一致である。プトン佛教史 *bu ston gyi chos hbyun* の王名、年代は舊唐書・新唐書などの記述とは大體の一致はあつても尙精確な對比は成功しない。テプテルゴンポ *deb gter sion po* の場合は王名はやはり同様の不一致性があるが、年代は割合に一致する。しかしこれは實は中國文獻を史料としてゐるためであることは私が嘗て指摘した如くである。⁴⁾

第二の問題は、チベット史料はチョェジュン *chos hbyun* (教法源流) の名の示すごとく佛教史的記述に満ちてゐるがその記述に對應する直接又は間接の史實が中國史料その他に一向に現れてこないために眞實性が疑われる。

第三にチベット文獻には奇蹟の記述が多い。

第四にチベット文獻はプトンが十三世紀、テプゴンが十五世紀という風に後世に著作されたものである。吐蕃時代

とは時代的にかなり離れており、原史料が如何なる程度用いられたかが疑わしい。

これらの點よりしてチベット文献は吐蕃時代の佛教を正確に傳えてはいず、恐らく後世に傳承として再構成されたものをそのまゝとり入れてゐるのではなからうか、傳承として、或は佛教文學の一種としては扱えるが、少くとも史的事實を述べた歴史の書としては利用することは危険なのではなからうか。このような疑問が最近までチベット文献の記述についてもたれ、その信憑性が疑われていた理由であつたのである。若しこのままで推移すれば吐蕃佛教史の構成などという問題は恐らくは半信半疑の不安定な條件下におかれたまゝであつたかも知れない。ところが最近ヨーロッパの學者たちにより吐蕃時代の石碑が新に續々とチベットに發見され、その碑文の判讀はこれらのチベット文献の確實性を證明する結果をもたらした。

先ずイタリアのトゥッチ氏 Giuseppe Tucci の一九四八年のチベット探險であるが、氏はこの時調査したチョンギエ *chphyon reyas* に存在する吐蕃王チデソンツェンの陵墓の側の碑文、ツルプ *mtshur phu* 所在の碑文、サム

イエ寺院の碑文並に鐘銘、カルチュン寺院の碑文などの原文ならびに翻譯を紹介し、就中サムイエ、カルチュン兩碑文についてはこれに對應するパーボツラレンワ *dpag bo gtsug lag phren ba* の佛教史 *chos bhyun* のうちに含まれた當時の勅令を、やはりローマ字轉寫ならびに翻譯を附して出版した。

The Tombs of the Tibetan Kings (Serie Orientale Roma I) Roma. 1950 (ブト略稱 TTK)

一方イギリスのリチャードソン氏 H. E. Richardson は殆どトゥッチ氏と同時にチベットと在り、唐蕃會盟碑、ボタラ碑文、シャイラカン碑文を調査したが、これも原文ならびに翻譯を付して前二者は一冊の單行本として出版し、後者は雜誌に掲載した。

Ancient Historical Edicts at Lhasa and the Mu

Tsung/Khri gtsug lde brtsan Treaty of A. D.

821-822 from the Inscription at Lhasa, London,

1952.

Tibetan Inscriptions at 'Zva-ñi Lha Khan, JRAS, Part 3 & 4, 1952. Part 1 & 2, 1953.

又フランスにおいてはバコー J. Bacot, トッサン Ch. Tousseint 兩氏が英國のトーマス氏 F. W. Thomas の參加を得て敦煌發見のチベット文「吐蕃年代記」その他を轉寫ならびに翻譯を付して刊行した。

Documents de Touen Houang relatifs a l'histoire
du Tibet, Paris, 1940—1946. (以下略稱 DTH)

もと／＼チベット文獻と中國史料との乖離の問題は敦煌から出た同時代的なチベット文古文書、ならびに唐蕃會盟碑などで若干の點についてはかなり具體的な解決を見た。しかし尙多くの部分において不一致な點は免れなかったのである。ところがこれらの新史料の紹介によつて歴史上の諸問題が相當程度まで解決されることになった。殊に碑文及び鐘銘は全く同時代的と考えられる點において史料の價値は絶大としなければならない。發表された全文をこゝに再検討する必要はないと思うので佛教史上若干の重要な點についてのみ私なりの見解を述べてみよう。

二

先ず第一に寺院の建立についてである。漢文史料即ち新

舊唐書吐蕃傳、冊府元龜などは何等これらについて記すところはない。たゞ慧超往五天竺國傳には大勃律國、楊同國、娑播慈國を述べた條に、⁸⁾

若是已東吐蕃、總無寺舍、不識佛法。

と記しており、反て吐蕃に寺舍も佛法もないことを言っている。ところで敦煌出土のチベット文の中には「チベット國に起りたる善知識 kalyāṇamitra の系統と名號について」記したものがあり、「サムイエ bsaṃ yas とトゥルナン hpbrul snain の善知識」と説明している。⁹⁾ サムイエとトゥルナンが、敦煌文書の書かれた年代晩唐より推して當時存在したことは一應豫想し得るのであるが、古典的佛教史書であるプトンの佛教史(以下略稱 BT)を見ると、當時實に多くの寺院が建立されているのである。これを表に示すと、

I. ソンツェンガンボ sron btsan sgam po 時代 (BT, 124b)

- a ガツェル ska tshal
- b タルグ khra hbrug
- c ズァンラム gtsan hgram

d ロンパギヤン grom pa rgyan
 e コンボインチュ koñ po bu chu
 f ロタダロムティン lho brag khom thin (TB.
 mthin)

g カダグ ska brag
 h ラビタヤンハ pra dum rise

i シヤンシルのルンニン byañ tshul (TB. tshal)
 gyi rlun gnou

j カムのチンロンタンロハント kham s kyi h'dan
 glon (TB. klon) than sgröl (TB sgron) ma
 k マンテルのジャトリン mañ yul byams sprin
 l モンユルのナムタンペンロギエルチュ mon yul
 bun than spa gro skyer chu

m ラサトタルナン ra sa h'phrul snan
 n ラモチエ ra mo che

II チデツクツェン khri lde gtsug btsan 時代
 (BT. 125a)

o チムプのナムセル mchims phu gnarn swal
 (TB. sral)

p ダルプル dar h'phur
 q カルタグ mkhar itag
 r ドインリンチュチンハ mdo sman (TB. smad)
 lin chu khri rise

s ラグマルのカチュシヤルコ brag dmar du ska
 (TB. sga) chu gar sgo

t パンタンカメ h'phan than ka med

u カチャワンチン ka chu ban (TB. pan)
 chuñ

v ランペルリンカン brag dmar h'grin bzain
 (TB. h'brin bzain)

■ チンメンチンメン khri sroñ lde btsan 時代 (BT.
 126b)

w サムトエ bsam yas

IV チデツェン khri lde btsan 時代 (BT. 130a)

x カルチュエンギエルチ skar chuñ rgyal (TB.
 rgya) sde

フトンはこちらの寺院の建立に關して詳細な因縁を述べているが、中には傳承めいたものもあり、これらの信憑性

が如何なる程度のものかという問題がある。ところがカル
チュン碑文によると (TTK. p. 104) 。

化身せる神贊普、祖チソンツェン khri sron brtsan の
御代に世尊の法を行じ、ラサの伽藍 ra sañ gtsug lag
khan など建て、三寶の礎をおき、祖チドゥン khri
hdus sron の御代にはリンギチツェ glin gi khri rtse
などに伽藍を建て、三寶の礎をおきたり。又祖チデツク
ツェン khri lde gtsug brtsan の御代にはラグマルの
カツ brag mar gyi kwa tsu とチンブ mchin phu
に伽藍を建て、三寶の礎をおきたり。父チソンデツェン
khri sron lde brtsan の御代にはラグマルのサムイェ
brag mar gyi beam yas など中央及び地方に伽藍を建
て三寶の礎をおきたり。神贊普チデソンツェン khri lde
sron brtsan の御代には又カルチュン skar chun の伽
藍など建て、三寶の礎をおきたり。

とあってチソンツェン即ちソンツェンガンポよりついで
各代の贊普が有名な寺院を建立している。この碑文の検討
に入る前にカルチュン碑文、サムイェ碑文について若干記
しておこう。

三

カルチュン寺院はトゥッチ氏によればラサより二マイル
程離れ、キチュ河 skyid chu の南岸に建てられたもので
現在は廢滅し、ラマガン Ramagan の村に四個の大法塔
mchod rten が残っているのみである (TTK. p. 50)。カ
ルチュン碑文はこゝに發見されたもので、その内容は、碑
文の冒頭に (TTK. p. 104) 。

化身せる神贊普チデソンツェンの御代に正法を永遠に確
立するため勅を増し加うるものなり。

とあるごとく、ソンツェンガンポよりチデソンツェンに至
るまでの各代の王が佛法の弘通に努力して來たが、自分の
代の前半には一時反佛的傾向が強くなった、しかし今は再
び佛法を奉ずべきであると確信し、その誓を群臣とともに
なすと述べたものである。トゥッチ氏の紹介した寫眞によ
ると (TTK. p. 51, Fig. 4) その字體、文章ならびに碑面
の風化の感じからして殆どこれが同時代のものである事は
何人も異存がないと思う。ところでこれに對應する文章が
パーボツラレンツォ dpah bo gtsug lag phren ba の佛教

史 (ja. 128b) の中に含まれてゐる (TTK. p. 104)。カルチュン寺院創立の際のチデソンツェンの詔勅 (以下略稱カルチュン詔勅) と稱するもので、これを碑文と比較すると前半は大意は同じであるが詔勅の方が碑文より文章としては詳しく、中段は碑文の 1. 26 より 1. 50 までと殆ど同一、後段は碑文に全く記されていないもので當時この誓に署名した廷臣たちの名を多くつらねてゐる (TTK. p. 100)。詔勅と一致しない碑文の 1. 51 以下はサムイエ碑文の 1. 9 以下全文と殆ど同文である。このことはパーボツラレンワの佛教史が十六世紀の著作であるにかゝわらず、その内容が古い材料を割合に忠實な形で含んでゐることを示し、その史料的价值が相當高いことを物語るものである。

第二にサムイエ碑文であるが、サムイエはラサの南方ツァンボ河 *tsan po* の流域にある有名な寺院で、曾てチンデツェンの時代にパドマサンバワ *Padmasambhava* (tib. *pad ma hbyun gnas*) の勧めによつて建立されたと言われている。事の次第はブトン佛教史などにも見え、壯麗な伽藍であつたようであるがこれは火災で消失し、創設以來のものはトゥッチ氏によれば石碑と梵鐘のみである

と云う (TTK. p. 43)。碑文の内容は佛法を行持し、必要な物品をこれらの寺院に給することを各代の王とも必ず實行すべきを賛普父子、君臣ともに誓うというものである。

この碑文には建立した賛普の名が全く現れていないので甚だ奇妙な感じを與えるが、それは兎も角トゥッチ氏の寫真により文體、字形、風化の程度などを判斷すれば、この碑が同時代的な史料であることはやはり疑い得ないものがある (TTK. p. 44, Fig. 3)。トゥッチ氏はこの碑文に對應するものとして、パーボツラレンワの佛教史 (ja. 108b, ja. 110a) に見えるチンデツェンの二つの詔勅を擧げている。

第一の詔勅 (以下略稱第一詔勅) は佛法を信ぜざるべからざる所以を述べ、父祖の代より佛法が行持せられ寺院が建てられてあり、こゝにサムイエ寺院を建立奉持することを我等賛普父子たちも誓うというもので、末尾に副本を十三作り各處の宮殿、寺院などにおくことを述べ、この誓に従つた王大臣以下の名を數多くつらねてゐる。内容的に言へばこの詔勅は文章上からはサムイエ碑文に近いものを持つてゐるが、碑文の短文なのに比較すれば約三倍の長さの

ものになっている。碑文と詔勅との關係はトゥッチ氏の記述においても推測的で甚だ曖昧であるが、事實いきなり兩者を關係づけることは少しく困難なようである。たゞ臆測的ではあるが、この詔勅の最初の部分に (TTK. p. 95) 贊普チソンデツェンの御代にサムイエルンギルプパ *bsam yas lhun gyis grub pa* の伽藍の寶庫におかれたる、紺紙に金泥をもて記して金の小箱に容れたる勅令の文書より型をとりて書かれたるもの。

との説明があり、末尾に (TTK. p. 97) 。

教法のチベット國に、前後如何ように生じたるかの説を記したる書と共におかれたるもの、ランティ *brañ ti* のシュリラヴァルマ *cri la va rma* によりて書かれたり。とあるのを見ると、この詔勅はそのまま原詔勅が寫されたものでなく、一度人の手を経ていることが思われる。又一方碑文も詔勅そのまゝではなくてやはり詔勅を簡潔化して文章にせられたと考えられるものである。

第二の詔勅（以下略稱第二詔勅）はチソンデツェンが父王チツクデツェンの時代の末期に反佛の傾向があったが、種々の災害が起つたので、再び父祖以來の佛教を奉持する

ことを王大臣たちが誓うことを述べたものであるが、その冒頭に (TTK. p. 98) 。

贊普チソンデツェンの御代に法の生じたる年代を記したる文書の對としておかれたるもの、ラメン *phra myen* によりて書かれ金の小箱に容れてペルサムイエ *dpal bsam yas* の寶庫におかれたるものに型をとりて書かれたるものなり。

とあつて本來の詔勅そのものではないようである。しかし内容的に見てその文章の古體性はこの詔勅が原文から離れたものとの考えを妨げる。恐らくかなり忠實に當時の詔勅を寫したものと見なすべきであらう。而してこのことは第一詔勅の場合にも同様であると考えられる。

これらの信賴すべき諸史料を材料にして再びブトン佛教史に記された寺院名の檢討に返らう。

四

先ず a—m の諸寺院についてである。これに關してはブトン佛教史 (123b—124a) にソンツェン王の時代のこととして、

ネパールの王オエセルゴチャ *hod zer go cha* (skt. *amgavarman*) の王女バーモチツン *bal mo khri btsun* を宮居に迎えては不動、金剛、梅陀多羅などを迎請し、シナの王センゲツェンポ *sen ge btsan po* の王女ギヤモコンジヨ *rgya mo koi co* を迎えては、彼女によりトゥルナンの本尊迎請せられたり。而してチツンは伽藍を建立せんと欲したるも能はず。(王は)チベットの地は精靈女の覆いかぶさりたるごとくあり、これを壓えざるべからざるを見たまい(精靈女の)右の肩にガツェル、左の肩にタルグ、右の脚にツァンラム、左の脚にロンパギャン即ち四隅に四伽藍、右脇にコンボブチュ、左脇にロタグコムディン、右膝にカダグ、左膝にラドウムツェと四邊を壓える四伽藍を建てたり。又右手掌にジャンツルのルンノン、左手掌にカムのディンロンタンロエルマ、右足掌にマンユルのジャムリン、左足掌にモンユルのブムタンパロギエルチュなど伽藍多く建立せり。(かくして)先づオタン湖 *ho than ntsho* に巖城を建て、木もて葺き、龍の型によりて漆喰を塗りこめたり。山羊 *ra* によりて土 *sa* を運びて地をならし、ラサ *lha sa* の伽

藍ラサトゥルナン *ra sa hphrul snan* を營めり。然るに突如北方の建築用具をおきたる所より、ひとりてに十一面觀音現れ出でたるをもつて、(王は)こゝに住せんことを請ひ願へり。

多少傳説めくが *a—m* の諸寺院が如何にして建立されたか、がこゝに簡潔に述べられている。

最初に *m* トゥルナンであるが、これは現在ラサ市の中央に位置する所謂ジヨカン *jo kha* で、モンゴル人はイエヘジヨ *yehe jou*、中國人は大召(寺)と呼ぶところの寺院である。プトンの右の文においてはトゥルナンがネパール公主によつて建立されたことは必ずしも明確ではないが、テプテルゴンポにはソンツェン王の時のこととして (*ka—20b*)、

二人の妃によりて又トゥルナンとラモチエの伽藍建立せられたり。

とあり、現在チベット人はやはりこの説を信じている。又右のプトンの文のはじめにトゥルナンの本尊がギヤモコンジヨ(シナの公主)即ち文成公主によつて迎請せられたと述べ、末尾に十一面觀音がトゥルナンに迎請せられたと云

うのは一見矛盾する如くである。しかしこれはプトンが前文の少しく後の所に、ソンツェン王の八十二歳で歿したときのこととして (125a)。

その時コンジョ (kon co TB. on co) の仰すらく、釋迦牟尼はラモチェより迎えてトゥルナン¹⁰の露台に遷しゆかしめ、門を漆喰もて閉し、そこに文珠師利を畫くべしと。かくしてチツンと(王と)三人ともに觀世音と合體してみまかりたまひ、大臣たちは二つの神體をとりかえて仰せのごとくなせり。

とあつて、本尊がとりかえられた状態を考えに入れれば解決する。即ちはじめの文は文成公主がもたらしたラモチェの本尊をトゥルナンにおいて以來の状態を述べており、末尾の文は本來のトゥルナンの本尊の因縁を述べているのである。¹⁰

さてそこでトゥルナン寺院に關する記録であるが、サムイエ碑文には冒頭に (TTK. p. 94)。

ラサ ra sa とラグマル brag mar の伽藍など三寶の礎を建て、

とあり、これに参照されるパーボの第二詔勅には (TTK.

p. 98)。

贊普の第四の祖チソンツェンの御代にラサの精舍 ra sahi pe kar を建て世尊の法を最初に行じてより、

とあり、チソンデツェンより四代前のソンツェン王のときにラサの寺院が建立せられたことを言っている。pe kar については早くラウファア¹¹が vihara のチベット訛語であるとの説を出したが、トゥッチならびにトーマス兩氏はチベットに導入された外國の神の名と考えた。しかしトゥッチ氏はこの史料を見てやはりラウファア説が正しいものとして自説を撤回した (TTK. p. 56)。第一詔勅には既存の寺院名として第一に「ラサのトゥルナン伽藍」 ra sahi phral snan gtung lag khan を擧げており (TTK. p. 96)。又末尾には副本のおかれた場所として最初に同寺院の名を擧げている (TTK. p. 97)。これらはチソンデツェン時代の史料であるから最古のトゥルナン關係の記事と見なすべきものである。少しく時代が下つてチデソンツェン時代のカルチュン碑文に (TTK. p. 104)。

チソンツェンの御代には世尊の法を行じ、ラサ ra の伽藍など建て三寶の礎をおき、

とあり、對應するパーボ佛教史のカルチュン詔勅には (TK. p. 101)・

(法を) 行ぜざるは適しからずと最初の祖ソンツェンは知りたまいて、ラサの精舎 *Iha sañi dpe har* を建てたり。

とある。dpe har は勿論前述の pe kar と同じであり問題はなすが、この場合ラサは *Iha sa* とあり、前の諸史料には全部 *ra sa* とあるのと一致しない。この相違は如何に解釋すべきであろうか。

今日チベット人は *ra sa* を *Iha sa* の古名と考え、トウルナンの名稱も *ra sa* *hiphrui snan* なる形を認めている。前掲のプトンからの引用文にもあるごとく、この寺院がはじめにオタン湖を山羊 *ra* によって *sa* を運び埋立して建設されたと言う傳承をそのまま信じているのである。しかし唐代文獻に吐蕃の首都として記されている邏些が *Iha sa* か *ra sa* かは從來は史料の上では決定が困難であった。ラウファーは早くよりこの傳説を引用して邏些 *ra sa* 説を唱えていたが、材料は後世の傳承であつたからその説の根據は薄弱であつた。¹²⁾ しかし今やかくも多くの根

本史料が *ra sa* と記しているのを見ると *ra sa* なる名稱は單に傳説的な存在として片付けることは不可能である。

因縁譚の眞否は兎も角やはり古代には實在した名稱としなければならぬであろう。しかし前述のカルチュン詔勅及び唐蕃會盟碑——これは詔勅を出したチデソンツェンの次の賛普チツクデツェン時代のものである——に *Iha sa* とあることは、當時既にこの名稱が首都名として存在したことを示している。従つて邏些が *ra sa* か *Iha sa* かは必ずしも一舉に解決できる問題ではない。¹⁴⁾ ラウファーは *Iha* は *ra* の音であるから「邏」には適わしくないと考えている。¹⁵⁾ 唐蕃會盟碑にチベット語の *Iha-m* が「食」、*Iha* が「他」、*Iho* が「土」で寫され *L* 音系の字で寫されていないことは或はラウファー説を有力にするかも知れない。¹⁶⁾

兎に角トウルナン寺院がチソンデツェン以前からあり、ソンツェン王時代に建立されたということは今や全く否定できない事實であることが明かになった。

第二に *n* ラモチェ寺院について述べる。この寺院はトウルナンに對してモンゴル人は、バガジョ *bagajou* 中國人は小召(寺)と呼ぶもので、ソンツェン王に降嫁した

唐の文成公主の建立したものと伝えられている。プトン佛敎史に (124b)。

ギヤモコンジヨ *rgya mo kon co* (TB. on co) はラモチエの伽藍を建立せり。

とあり、テブゴンにも前掲の如くソンツェン王の妃の一人によってラモチエが建立せられたことが述べられている (五六頁)。(下段)。

そこでこれに對應する記事を根本史料に求めると、第一詔勅にトゥルナンとならんで前代に建立された寺院の名として (TYK. p. 96)。

シナ人の建てたるラモチエ *rgya btags ra mo che* の伽藍

が擧げられ、同じく末尾の詔勅の副本を送った寺院名にやはり (TYK. p. 97)。

ラサのシナ人の建てたるラモチエ *ra sañi rgya btags ra mo che*

の名が擧げられている。その他の史料にはラモチエの名は見えないが、或は第二詔勅及びカルチュン詔勅に「ラサのペハル」と呼ばれたものがトゥルナンのみでなく、ラモチ

エをも含んでいるのかも知れない。

ラモチエの實在はチソンデツェン以前であり、その創立を文成公主にかけるのは恐らく事實として認められるであろう。ラモチエが公主によって創立されたとすると中國人の僧侶が當時チベットに入っていなかったかという疑問が當然起ってくる。プトン、テブゴンによれば中國僧侶はチベットの内外で種々の活動を行っており、それは最後にチソンデツェン時代の有名な御前法論へと發展する。これについては最近ドミエヴィル氏 *Demiéville* の優れた研究が出たので詳細はそれにゆずりたい。これによってその背景を知ればラモチエの古くからの存在は一層當然なものと考えられるであろう。

五

第三にbタルグの寺院である。これについてはテブゴンにはソンツェン王の時のこととして (20b)。

禪定處も亦多く建て、ウイのタルグ *khra hbrug* とタードゥル *mñah, hñul* ヤンドゥル *yan hñul* の伽藍など多く建てられたり。

とある。トゥッチ氏の紹介によれば、この寺院はジュンガル兵のために焼かれ、十三代ダライによって再建されて昔の悌は殆ど残っていないが、唯一つ銘文の刻まれた梵鐘が考古學的な興味を呼ぶと言う(TTK. p. 70)。その銘文には、この大きな梵鐘はチデソンツェン lha btsan po khri ide sron btsan の時におかれ、すべての有情が德行に入るべきことがその妃のジャンチュブ byan chub によって祈られている。ところで第一詔勅にはその詔勅の副本のおかれた場所の一つにタルグのタシヘル伽藍 khra hbrug gi bkra cis lha yul gtsug lag khan が挙げられてをり、チンデツェンの時代に既に存在したことが明かに證據だてられている(TTK. p. 97)。記載の順序よりすれば第一のトゥルナンの次に存在するのは寺格の高位と同時に古いことをも暗示している。これがソンツェン王の時代に建てられたとの記述は信用されてよいものと思われる。

第四に o チムプのナムセルである。カルチュン碑文に (TTK. p. 105)'

チデツクツェンの御代にはラグマルのカツとチンブ

nchin phu に伽藍を建て三寶の礎をおきたり。

とあり、寺名はないが恐らく同一寺院のことと考えて誤あるまい。テプゴンにはチデツクテン khri ide gtsug brtan がソンツェン王の書き残した銅板の豫言書を發見した場所をチムプ hchims phu としている(後述)。ダス S. Ch. Das は hchims phug としてサムイェ近傍の小寺院のある聖地を述べているが、いづれ皆同一地を指した呼稱であろう。オーバミラー Obermiller はプトンの翻譯に「チムのプナムセル」 Mchims Phu gnam sral としているが明かに誤である。

第五に s ラグマルのカチュシャルゴである。これは前引のカルチュン碑文にあるラグマルのカツ brag mar gyi kwa tsu であろうが、第二詔勅には (TTK. p. 98)'

贊普父チデツクツェン btsan po yab khri ide gtsug btsan の御代にラグマルのカチュル brag dmar gyi kwa chur の伽藍を建てたり。

とあり、カルチュン詔勅にも同様の文がある (TTK. p. 101)。

ラグマルはサムイェを含む地方の名であるが、カチュというのは如何にも非チベット語的である。これについてト

ウッチ氏は大要次のごとく述べている (TK. p.62)。

我々はチデツクツエンの時代にチベット人がシナ人より奪取したと揚言している瓜州城 a town Kwa chou を知っている。一方カチュル²¹の寺院は、碑文に述べられているこの同じ王によって創建されたのである。カチュルの語は全くチベット語とは思われない。そしてその綴りは不確實である。そこで我々はこの寺院はその城市に對する勝利を記念するために建てられ、その時その名が付けられたとするのは正しいことだと思う。

瓜州城が吐蕃の手中に陥ったことについてトウッチ氏は敦煌から出た吐蕃年代記を利用したのであるが、それには卯の年 (七二七) の條に (DTH. p. 24, p. 48)。

カチュシンチャン kwa chu sin can のシナの城塞は占領せられたり。

とある。唐側記録では新唐書吐蕃傳上、開元十五年九月の條に、吐蕃の大將悉諾邏恭祿 stag sgra khon lod と燭龍莽布支 tsog ro (?) man po rje が瓜州城を陥れたとの記事がこれに對應する。タグラコンロエは年代記によると (DTH. ibid.)、その年のうちに大論 blon chen (＝總

理大臣) に任命されているから瓜州攻略は吐蕃にとって重要な功績と考えられていたのであろう。さればトウッチ氏の如くこれの記念のために中央チベットでカチュの名を付した寺院が建立されたと考えるのは必ずしも大膽すぎるという程の推定ではない。ましてトウッチ氏は同様にして中央チベットに他方の地名が遷され用いられる例を若干擧げているにおいておやである。

それにしてもカチュワンチュンもこれに關係ありそうに見えるのであるが、他の文献には何等この名について記すところがない。

六

第六に p sam i e 寺院についてである。この有名な寺院については、プトンにチソンデツエンの時のこととして (136b)。

それよりロブン slob dpon (＝パドマサンバワ) はサムイエに招かれて (そこに) 館を構えられたり。ロブン・ボディサトワ slob dpon bo dhi satva は地を檢べたまい、オタンタプリ o tanta pu ri の伽藍に型をとり

て須彌山、十二州、日月一對の（飾りある）鐵壁もて圍みたるものを作りて、丁卯の年に基礎はおかれたり。

先ずアーリアパロ *aharya pa lo* の寺院が建てられ、諸佛はチベットの人々の型をとりて彫作せられたり。正后ツェボン氏マルギェルメトグロエルマ *tshe spon bzah* (TB. spois za) *dmal rgyal me tog sgrol ma* はカヌムサンカン *kham s gum zañs* (TB. zañ) *khañ* 寺を建て、ボヨン氏ギェルモツン妃 *pho yoiñs bzah* (TB. za) *sgyal mo btsun* はウツェルセルカン *dbu tshal gser khañ* 寺を建て、ロ氏ジャンチュブモン妃 *hbro bzah* (TB. za) *byan chub smon* はゲギェジエ *dge rgyas bye ma* 寺を建てたり。癸卯の年には工完りて、阿闍梨ボディサトワとパマサンバワ *padma sain bha wa* は境内に住して十三年の間宴をなせり。とあるが、テプゴンにはパドマサンバワがサムイエに至りたることゝ (ka 22a)。

サムイエの大伽藍の基礎をおきたり。

とあるのみである。ところでサムイエ碑文は確かに當時の贊普父子が佛教の信仰を確認した詔勅文なのであるが、重

要な贊普の名が全く記されていないのである。カルチュン碑文に (TTK. p. 105)。

父チソンデツェンの御代にはラグマルのサムイエ *brag mar gyi beam yas* など中央及び地方に伽藍を建て三寶の礎をおきたり。

とあり、又サムイエ寺の梵鐘の銘には (TTK. p. 108)。
女主皇后國母 *jo mo rgyal mo btsan yum* と御子は十方の三寶すべてを讃嘆するためにこの鐘を作りたり。その功德の力によりて神贊普チソンデツェン父子の導きの方法たる聲音は六十の響あるものとなりて無上の悟りを成就するを望むなり。

とあって、明かにチソンデツェン王の時代の建立なることを示している。

先ずこれでサムイエ寺院建立に關する佛教史類の記載が誤でないことは知られるのであるが、次にサムイエ碑文に對應するパーボの佛教史その他を検べて見よう。第一詔勅には (TTK. p. 96)。

贊普父王逝きたる後、種々の様相の型により、伽藍フンギドゥッパ *lhun gyis hgrub pa* を羊の年春の月の十

七日に礎を建て、それより以來、チベットに三寶の礎を建て世尊の法を行じ壞たざることを賛普父子と子の母は誓いて約をなし、内外の大小大臣^し下のものたちも誓いたる勅令を文字に書きしるすなり。

とあり、續いてトゥルナン、ラモチュとラグマルのサムイエフンドゥプの伽藍 *brag nar gyi sam yas lhun yis bgrub pa kyi gtsug lag khan'* カムスムのミドクロエ *l kham gsun mi ldog sgröl* の伽藍などチベットの當局によって建てられたことを云っている。これはサムイエ寺院の建立について日付のある唯一の史料であろうが、プトンの年次と一致せず、いずれが正しいのか、或はいずれとも正しいのか遽に断定は困難である。²²⁾ この第一詔勅の最後に記されている詔勅の副本のおかれた場所には第一にトゥルナンとならんでラグマルのサムイエフンドゥプの僧團 *brag nar gyi bsam yas lhun gyis grub kyi dge bdun* が擧げられ、第二の副寫のおかれた十個所のうちにもサムイエフンドゥプの伽藍の名が出されている。又第二詔勅を見ると、これは冒頭にベルサムイエの寶庫 *dpal bsam yas kyi dkor mdsod* にある型によって書いたと

あり (TTK. p. 98)。²³⁾ サムイエがチソンデツェンの時代に建立され重要な寺院となっていたことが證明されるのである。カルチュン詔勅もやはり (TTK. p. 100)。

サムイエフンドゥプの伽藍に父王のものとしておかれたるものをもととして書きたり。

と記している。サムイエ碑文が冒頭に (TTK. p. 94)。

ラサとラグマルの伽藍など、

と記しているラグマルは寺院名を明かにしないが、碑文の性質から言つてラグマルのサムイエフンドゥプとするのは必ずしも誤っていないと思う。

佛教について殆ど記すところのない敦煌發見の年代記にチソンデツェンの事蹟として (DTH. p. 114, p. 153)。

無上の佛法を受容し、中央・地方すべての地に伽藍を建立し、法を確立し、一切のものの慈悲に住し(法を)思うことによりて生死より解き放ち又解脱へとゆかしめたりとある。これはこの年代記における唯一の吐蕃王の佛教事蹟であるが、これによつても王の信佛が有名な事實であつたことが知られるであろう。又こゝに詳しくは述べないが第二勅詔に表れた佛教教義の説明なども決して簡單素朴な

内容のものではない。たとい王自身が書いたものではないにしても、そのような程度のもので詔勅のうちに盛られている點に注意すべきである。

七

第七にヌカルチュンギエルデである。これについてはカルチュン碑文の存在そのものが明かに事實を物語っている(TTK. p. 105)。

神贊普チデソンツェンの御代にはヌカルチュン *skar cun* の伽藍などを建て、三寶の礎をおくなど……

こゝで問題となるのはプトンにこの寺院を建立した王をチデツェン *khri lde btsan* としていることである。チンデツェンが何時歿したかと云う問題から始めて八〇四年チデソンツェンが即位するまでの間、王位の繼承が如何に行われたかはいずれの文献も極めて不明確であり、古代チベット史の年代決定に最大の難關をなしている。このことは前にも少しく觸れたことがある。²³⁾ プトンはチソンデツェンの次に立ったムネツェンポが一年七ヶ月で早逝したことを記した後に次のごとく言う(130a)。

それより弟チデツェン四歳にして王位に即きセナレグと稱せられしが、この王はカルチュンギエルデを建て教勢を盛にしたまへり。王には御子五人生れたまいたるが即ち(A)チデソンツェンレーパチェン、²⁴⁾ (B)ゾアンマ、(C)チダルマウドゥムツェン、(D)ラジェフンドゥブ、(E)チチンボなり。

* 印以下について論議の必要上テキストを掲げると、

/ de la sras lha khruis te khri lde sroa btsan
ral pa can / gtsan ma dan / khri dar ma ñu dum
btsan / lha rje lhun grub / khri chen po /

DとEは王位に即いていないのでこの場合は問題にする必要はない。Cは中國文献の達磨王で所謂ランダルマに當るがこれも今は別に注意する必要はない。問題はAにある。レーパチェンと呼ばれるものが唐蕃會盟碑や敦煌文書などに出るチツクデツェン、中國文献の可黎可足に當ることは今は何人も疑うものがない。従つてAのチデソンツェンレーパチェンとあるのはチツクデツェンレーパチェンと訂正しなければならぬものである。しかしチデソンツェンなる王名を全く抹殺することは不可能である。というのはチツ

クデツェンの前にはチデソンツェンという王が現實に存在したからである。²⁵⁾かくするとプトンのチデツェンはチデソンツェンの誤記ということになるがそれを確定化するのが實は前記のカルチュン碑文の記述に外ならない。それを更に裏打するのは碑文と殆ど同じ内容のカルチュン詔勅であろう。これもチデソンツェンがカルチュン寺院を建立し佛法を守護することを一族ならびに群臣たちと誓っているからである。

しかしプトンにはA以下とチデツェンとの間には親子關係が存在していた。従って兩名が訂正されてチツクデツェンとチデソンツェンとなった場合、やはり彼等の間に親子關係が存在したであろうか。この證明については敦煌發見の「王統書」によらなければならぬ(DTH. p. 82)。

チソンデツェン khri sron lde brtsan とツェボン氏マギェルドンカル tshes pons za rma rgyal ldon skar の間に生れし御子はムネツェン mu ne brtsan とデニンツェン lde sron brtsan。ムニンツェン mu brtsan の系統は絶えて、デニンツェンとロ氏ラギェルマンモルジェ bpo za lha rgyal man mo rje に生れた²⁶⁾御

子はチツクデツェン khri gtsug lde brtsan とウイドラムテン buñi dum brtan ………

この王統書はウイドラムテン即ちプトンのチダルマウダムツェンまで記してあることにより、これより後の作品であることは明かであるが、その文體の古さから言えは遙か後世のものとする程のものではない。

この書の信憑性は種々の點から證明できるが、例をチンデツェンとムネツェン(ポ)、(チ)デニンツェン兩王の親子關係について述べよう。ムネツェンポについては複雑な問題があるのでその論議は別の機會にゆすりチソンデツェンとチデソンツェンの關係だけに限ろう。チデソンツェン時代のカルチュン碑文によるとサムイェ寺院の建立に關して(TTK. p. 105)。

父チソンデツェンの御代に yab khri sron lde brtsan gyi rin la

とあり、對應するカルチュン詔勅にも(TTK. p. 101)

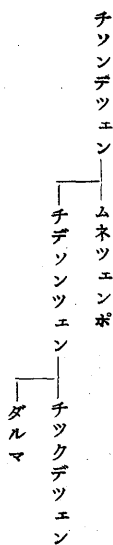
父チソンデツェンの御代に yab khri- gyi sku rin la.
父チソンデツェンは法を大に御心に容れ yab khri- gyis
chos rgya cher thugs su chud nas.

父チソンデツェン未だ幼かりしとき *yab khri. sku*
chun bai tshe.

父チソンデツェンの御身に *yab khri. gyi sku la.*

とある。兩者の父子關係は確實に存在するのである。

我々はこの一連の考察により次の系圖を作成することが
 できるであらう。



もとより吐蕃王統論に關する最大の難關はこれを以て全く
 解決したのではない。中國史料はこれと若干矛盾しており、
 それに伴う年代の決定もこれのみにては何等結論には到達
 しない。しかし今當面の問題であるプトンの記述の誤だけ
 は完全に訂正し得た。かくしてチソンデツェンの時代にカ
 ルチュン寺院が建てられたことは事實としては確定し得る
 のである。

以上によつてチベットの佛教史諸書に記された寺院の若
 干についてその實在性を證明したが、*a, c, l, p, r,*
t, v など實證し得ないものが少しく残っている。しかし

これらは同時代的な史料がないために創設が確定し得ない
 だけで恐らく他の文献の検討により實在は明かにし得るも
 のである。例として *v* ラグマルリンサンをとり上げよう。
 これについてはテブゴンに (*ka 20b*)、

チデツクテン *khri ide gtsug brtan* の大臣は、チンパ
bcshims phu より掘りだされたる容器のうちより、ソン
 ツェン王の勅即ちその(王の)甥に我が名に *ide* を付した
 るもの出でそれによりて佛の教は弘通せらるべしと銅板
 に記されたるものを得たり。よつて(王は)その *ide* は
 我なりと考えてラグマルリンサン *brag dmar hgrin*
bzans などの伽藍若干を建てたり。

とあり、プトンにはチソンデツェンの時ボデ・サトワをネ
 パールより招聘してラグマルリンサン *brag dmar hgrin*
bzan に至つたとの記事があり(*126b*)、テブゴンとは綴字
 が少しく異なるが同一寺院を指していることは疑えない。遺
 憾ながら新出のいずれの史料にもこの寺名は見えないため
 に、こゝには創設の事實を積極的に斷定できないだけであ
 る。

尙逆に新出の史料によつてプトン、テブゴンなどに見え

ない寺院で存在が明かになったものもある。カルチュン碑文に (TTK, p. 104)・

祖チドエン khri 'dus sron の御代にリンギチヅェ
glin gi khri rtse などに伽藍を建て三寶の礎をおきたり。

とある。寺名でなくて地名のようにも見えるがその位置を決定することは困難である。チドエンは中國文献の器弩悉弄に當り、六七九—七〇三年の間在位した吐蕃王である。²⁶⁾ 又第一詔勅には既設の寺院としてトゥルナン、ラモチエとならんでカムスムミドクロエル伽藍 khams gsum mi ldog sgrol yi gtsug lag khan の名が出ている。同詔勅の末尾に副本のおかれた場所として「ラグマルのカムスムミドクロエル」 brag mar gyi khams sum mi ldog sgrol とあるのでラグマル地方に存在した寺院であり、並列された寺院名よりして當時の名刹であったことが知られるであらう。

八

さて次に當時政治上活躍した佛教僧について若干述べて

おきたい。新唐書吐蕃傳上に、

其俗……喜浮屠法、習呪詛、國之政事必以桑門參決。

とあるが、中國文献に吐蕃の佛教僧が政治上活動した記録は殆どない。たゞ長慶會盟の時に會盟を司ったもののうちに佛僧である鉢擊連がいたこと(述後)だけが記されているのみである。一方チベット文献の上では僧侶の宗教上の活動は數多く記されているが政治に影響を及ぼしたものについての明瞭な記録はあらわれていない。従つて前掲の新唐書の記載は實證されないまゝで終つてゐるわけなのであるが最近リチャードソン氏の調査したシャイラカン碑はこれについて重要な史料を提供した。

シャイラカン shwari lha khan はリチャードソン氏によれば、ラサの東北五十マイルばかりのキチュ河のほとりにある寺院である。碑は二つあり、寺院の前庭、建物の入口の兩側に南面並列して立っている (RAS, 1952, p. 133)。リチャードソン氏にならぬこれらをそれ／＼東碑・西碑と稱するが、ともに碑文は南面のみに刻されている。内容は兩碑ともチデソンツェンがティンゲンジン tin ne 'dgin なる人物の恩愛深きによりその功勞に酬いるため、彼及び

彼の一族にその土地の支配權その他の特權を與えることを述べたものである。前述のごとくりチャードソン氏がこれの原文、翻譯、註釋を施した研究を出しているので、別にこゝにそれをくり返す必要はなく、たゞ當面の問題に關係する點のみを述べておこう。

第一にティンゲンジンは、この碑の中では屢々ワンデ・ティンゲンジン *ban de tin ne hdsin* と呼ばれ佛僧であることが明かなことである。勿論ニャン・ティンゲンジン *nyan tin ne hdsin* と呼ばれていることもあるが、ニャンはその出身の族名である。興味あるのは次の句である (*Ibid.* 1952, p. 151)。

ワンデ・ティンゲンジンこそは、初めより終りまで親愛の情をもちて我幼少の頃より政をとるに至るまで父母の位置にて行動せり。善をなすことを心より望み、眞實の伯父の位置にて行動し我を育てたり。父子、兄弟、母子、上下のごとく心よろこび和合して結ばれたり。すべてに善き忠言を奏し、公務をなすに當りては絶えず効果をあげ、憐愍の情は深かりき。

これによるとチデソンツェンの幼少の頃よりティンゲンジ

ンは後見者として盡力し偉大な功績をあげた如くである。そこで同王時代のカルチュン詔勅を見ると、三寶を敬禮することの誓をなした人々の名のうち、王族について大臣以下の所には次の如く記されている (TTK. p. 103)

國家の大臣以下大小大臣の誓いたるものうち、僧の命令に従えるもの、ワンデ・ランカ・ユンテン、ワンデ・ニャン・ティンジン。

*chab srid kyi blon po man chad blon po che pura
bro sisald pa la / ban de bkah chen po la gtogs
pa / ban de bran ka yon tan / ban de nyai tin
hdsin /*

右のティンジンがティンゲンジンの略であることは疑ないであろう。而してこの文に續いて「國家の大臣の命令に従えるもの」として大論以下の人名が挙げられている。その順序より見るとティンゲンジンの位置は臣下としては最高のものであることが理解されるのである。ティンゲンジンに關して佛教史類が記載していることについてはリチャードソン氏が種々な検討を行っているのでこれに加える必要はないと思う。しかしそのうち記載を豫想されるプトンに

は彼に關する記事は實は全くないことを注意しておきたい。

九

次に長慶の唐蕃會盟に司祭の役割を果した鉢掣連について述べよう。これに關しては嘗て少しく觸れたこともあるので今多くは述べないが、名稱の問題その他について若干加えておきたい。

唐蕃會盟碑の吐蕃側の官吏名を記した部分に最初に出てくるのは次の名である。²⁸⁾

大命に従いて内外……を支配し國家を總理する……大僧侶
 ペルチンボ・ユンテン

//bkah chen po la gtogs te phyi nau……s la dbai
 shin chab srid jdsin …… ban de chen po dpal
 chen po yon tan//

……□□政同平章事沙[門]……

新唐書吐蕃傳下に出てくる鉢掣連及び冊府元龜外臣部盟誓、舊唐書吐蕃傳下に見える鉢闡布がこれを指すことは明かである。ところで前掲のカルチュン詔勅からの引用文を見るとティンゲンジンの上位にやはりワンデ・ランカ・ユ

ンテンという人物があり、年代的に見て先ず同一人と考えて誤あるまい。何となればチデソンツェンの時代は八〇四—八一五年であり、²⁹⁾次王チツクデツェンの第八年(八二二)に會盟は行われているからである。³⁰⁾たゞペルチンボという名稱がカルチュン詔勅には見えないがこれは稱號として用いられたためかも知れない。冊府元龜外臣部盟誓には、國政蕃僧號鉢掣連。

として稱號のごとくとり扱っているからである。ラウファ³¹⁾は鉢掣連を dbai chen po と見、³²⁾ペリオは dpal chen po であらうとしたがペリオ説が當っていると思われる。

遺憾ながら會盟碑のこの所は音譯されているはずの漢字の部分が全く磨滅しているため、明確に決定できないのである。ランカの名稱については前に述べたこともあるが、地名乃至は族名と考えると誤ないものである。³³⁾

さてプトンを見るとレーバチェン(チツクデツェン)の事蹟として(130b)。

出家に政權を捧げたるにより、大臣のボン教を好むものは怒りて戒法を壞たんことをひそかに定めたり。

とあるが、政權を與えられた出家というのは恐らくユンテ

ン或はその一派を指しているのであろう。つまりて(30b)、王妃ゲンツルマ *nañ tshul ma* と大ワンデベルギユン *ten ban de chen po dpal gyi yon tan* とは姦通したりの噂ひろまり、大ワンデは殺されて王妃は自殺せり。とあるが、これがプトンのユンテンに關する、而して政治に參與せる僧侶についての唯一の記録である。プトンのみでなくその他の佛教史類もほとんど同様政僧に關する記事は存在しないので、シャイラカン碑文、カルチュン詔勅、唐蕃會盟碑のような同時代的史料はこゝでも重要な事實を明かにしたのである。

ところで以上の事實を認めるとするならば、本論のはじめに引用した慧超傳大勃律國、楊同國、娑播慈國の條に「吐蕃には總じて寺舎はなく佛法を知らない」とあるのは如何に解釋すべきであらうか。これについてはその前文を充分に検討しなければならない。

此三國竝屬吐蕃所管、衣著言音人風竝別……地狹少、山川極險、亦有寺有僧、敬信三寶、

これら三國は當時吐蕃に役屬せられていながら既に寺院、佛法は存在したのである。大勃律國は *Balistan* であり、

楊同國は羊同國とも書かれ西チベットに當てられている。西チベットには既に佛法は入っていたわけだ。慧超も從つてこの程度吐蕃領域に佛教が入っていたことを認めていたのである。彼の言う吐蕃は吐蕃本地であり、中央チベットに當ることは自ら明かであるが、こゝに佛教が行われていたことは流石の彼も知らなかったのであろう。北天竺から吐蕃本地までは地勢的に人種的に重層性が存在しており、眞實を知り得るのには甚だ困難が伴っていたことを考えなければならぬ。結局この記述は慧超の認識不足に基くものと考してさしつかえないものであろう。

一〇

以上縷々として寺院ならびに政僧の存在を具體的に新出史料によつて述べてきたが結論は簡單である。

從來チベットにはチョエジュンの名によつて一括し得る佛教史類が若干存在した。多くは後世の著作で同時代的史料と合致しない不正確さがあり、その意味で史料の價値は疑われてきた。特に佛教に關する記載は宗教文獻のそれに共通する性格として加上的な傳承の集成と見なされる傾向

が強かった。しかし今やそれらは右に述べた部分的な證明によつてその歴史的眞實性が明かにされたのである。もとより一斑を以て全豹を推すことは慎むべきことゝしなければならぬ。しかし兎に角チベット傳來の佛教史類は物語ではなく、一個の信賴すべき歴史的事實の記録であることが明瞭にされたのである。もとよりその中には奇蹟の記事もあれば年代の誤も含まれている。その意味では必ずしもこれを中國文献と同列に扱うことは困難であらう。しかし中國文献その他のものに全く記されていないチベットの佛教事情を伝える點ではやはりそれら文献の史料價値は相當高いものと云わざるを得ない。今や我々は尙種々の検討の上にはあるがこれらの文献が全面的に利用することが可能であるとの見解に到達した。しからばこれらの文献をとりあげ利用することによつて如何に吐蕃佛教史が再構成されるか、この問題については又別に稿を更めて論ずる機會を持ちたいと思う。

〔完〕

註

- ①例えは Cosma, A Grammar of the Tibetan Language, Calcutta, 1834, p. 151 にはチベット語の年表が掲載されてゐるが、その材料は Baidurya (skr. vaidurya) dkag po である。

② Rockhill, The Life of Buddha, London, 1881 のうち

Chap. VII, The Early History of Bod-yul (Tibet) 参照。

③ Bushell, The Early History of Tibet. From Chinese Sources, JRAS, 1880, p. 435.

④ 拙稿「西藏文献の史料價値」下、東洋史研究第十一卷二號、六〇頁。

⑤ 藤田豊八「慧超往五天竺國傳箋釋」第二北京版三十二丁表。羽田亨「慧超往五天竺國傳箋錄」紀元二千六百年記念史學論文集、京都帝國大學文學部、昭和十六年、四三五頁。

⑥ 拙稿「古代西藏文化の一考察」歴史學第一輯、昭和二十四年、一三一頁。

⑦ 本論文に使用したプトン佛教史は東北大學所藏のプトン全書に含まれているものである。

「善逝の教について明かならしむる『法の源泉、經言の寶藏』と名づけられたるもの」*bde bar gcegs pa'i bstan pa'i gsal byed, chos kyi hbyun gnas gsun rab rin po che'i mdsod ces bya ba* (東北大學「西藏撰述佛典目錄」No. 5197)。

文中 TB とあるのは東洋文庫所藏のタシルンボ版を指しているが、兩テキストの間に綴字の相違が屢々見られるので、固有名詞に關してはこれを付記することにした。東洋文庫本の利用については同所主事岩井大慧並びに所員壬生台舜兩氏に種々御高配を添けなくした。記してこゝに厚く御禮申し上げる。

⑧ 東北テキストでは *d · p* の間に *cad* がおかれているが TB にはこれがなす。

- ⑨この僧名をトゥッチ氏は *glavarman* の寫と見てゐるが妥當である。(TTK. p. 82, fn. 95)。
- ⑩兩本尊は十世紀にとりかえられたとの説もある (S. Ch. Das, *Tibetan-English Dictionary*, p. 1161) が今はブトンの記述のみに従つて置く。
- ⑪B. Laufer, *Loan Words in Tibetan*, No. 14, TP. 1915, p. 451.
- ⑫B. Laufer, *Bird Deviation among the Tibetans*, TP. 1914, p. 80, fn. 3.
- ⑬拙稿「唐蕃會盟碑の研究」東洋史研究第十卷四號「二八頁、三三頁。
- ⑭トゥッチ氏は *ra sa* とは *Lhasa* の溪谷の古名であると述べてゐる (TTK. p. 81, fn. 86)。^① 溪谷名と聚落名とはその範圍が異なることになるが果して嚴密にそう考えるべきかどうか。少くとも當時は *ra sa* と云へば溪谷でもあつたし同時にその中の聚落の名でもあつたのではなからうか。
- ⑮Laufer, *ibid.*
- ⑯拙稿前掲書「二二頁一〇行、二二頁一九行、二二頁一四行。
- ⑰Paul Demiéville, *Le concile de Lhasa, une controverse sur le quétisme entre bouddhistes de l'Inde et de la Chine au VIII siècle de l'ère chrétienne*, Paris, 1952 の 47 頁 Introduction を参照せられたる。
- ⑱Das, *ibid.* p. 445.
- ⑲Overmiller, *History of Buddhism by Bu-ston*, II part. p. 186, オークミラーの使用したテキストに *mnichs* とあつたため、彼はこれを有名なチム氏族の地の名と誤つたのであらう。
- ⑳但し第二詔勅の場合は王名は *khri lde gtsug btsan*, 寺名は *brag mar yi kwa chur* である。トゥッチ氏はこの翻譯では *kwa chun* とつてゐるが (TTK. p. 52) *chur* が正しいのである。
- ㉑兩人の人名比定については拙稿「古代西藏の内部構造」古代學第一卷二號八〇頁、註三・四。
- ㉒芳村修基氏はブトンの丁卯の年を七二七年に比定してゐられるが「ブトンのチベットの佛教史」三二頁、佛教學研究第六號、昭和二十六年) ナン・ツェン氏の即位年次七五五年より考へて無理があると思う。トゥッチ氏はこの羊の年を七九一年と考へ、これが最も受容れやすい説であると述べてゐる (TTK. p. 81, fn. 85)。
- ㉓「西藏文獻の史料的价值」下五七—八頁。
- ㉔A B 間の *cad* は T B には存在しない。
- ㉕前掲書、五六—七頁。
- ㉖前掲書、五九頁。
- ㉗「古代西藏文化の一考察」一二八頁。
- ㉘「唐蕃會盟碑の研究」二〇頁。
- ㉙「西藏文獻の史料的价值」下、五九頁。
- ㉚前掲書、五六頁。「唐蕃會盟碑の研究」三三頁
- ㉛Laufer, *Bird Deviation*, p. 28.
- ㉜Paul Pelliot, *Quelques transcriptions chinoises de noms tibétains*, TP. 1915, p. 14.
- ㉝「唐蕃會盟碑の研究」一五頁。

(本稿は昭和二十九年度文部省科學研究助成金による「正史北狄傳の總合的研究」の成果の一部である。)

The Sources on T'u-fan (吐蕃) Buddhism

Hisashi Satō

The Chos ḥbyun or the history of Tibetan Buddhism still constitute principal sources for the study of T'u-fan Buddhism, but they often disagree with more reliable Chinese sources, which, to our great

regret, are not rich on the history of Buddhism. Accordingly, the reliability of the chos ḥbyuṅ has been much in question. Recently, as the result of comparative study of the chos ḥbyuṅ with those inscriptions as well as the Tun-hang (敦煌) documents brought to light by G. Tucci, H.E. Richardson, J. Bacot and F.W. Thomas. Bu-ston's chos ḥbyuṅ and the Deb gter sñon po seem to be accepted not only as religious but historical records. The stories of the origins of monasteries and of their political influence, which are told in those T'u-fan materials, bear witness to their historical actuality.